

『人生論ノート』から見る三木哲学の構想

— 「創造的無」をめぐる二つの観点 —

森下 直貴

はじめに

「死者のリアリティ」報告の中で示したように、『人生論ノート』の冒頭章「死について」では新しい「死の見方」が打ち出されている。それが「死者の生命」という観点である。その観点到立つと、私の解釈では生者とのコミュニケーションの中で死者がリアリティ（主体的真実）を持って立ち現れ、両者のコミュニケーションを通じて思想が伝統として継承されることが可能になる。ただし、「死者の生命」の観点是『人生論ノート』全体の中では異端である。それ以外の章で扱われているのは死ではなく、「幸福」から「旅」にいたるまですべて生の内部の諸相である。とすれば、『人生論ノート』の冒頭になぜ「死について」が置かれているのか。また、『人生論ノート』では「虚無からの形成」を生み出すために制作による形成の観点在前面に出ているが、これと死者の生命の観点とはどのように関連するのか。さらに、それら二つの観点在混在することは三木哲学にとって何を意味するのか。以下、三木哲学の変容過程を踏まえつつ、「人間の条件について」の章を節群ごとに分けて精読する中で、一連の疑問に対する答えを探してみる。それを通じて浮かび上がってくるのが三木哲学の将来の構想である。

1 人間の根本条件としての「虚無」

第一節では「虚無」というパトス的な受け止め方が人間の根本条件とされている。ここで「虚無」とは主体的パトス的な虚無感のことであるが、その一方で虚無は「掻き集められるもの」とも言われる。この節では「虚無」のそのような二重性には言及されていない。そのため「虚無からの形成」という根本テーゼの意味が曖昧になっている。同様の指摘は「生命」についても当てはまる。この章では生命と「人間的生命」が区別なく用いられている。三木の念頭にあるのは人間の超越性あるいは脱中心性を根拠とする人間的生命である。人間的生命と生命一般とでは「開かれたもの」と「閉じたもの」という決定的な差異があり、同じ形成力でも違いが生じる。

虚無の二重性はようやく第二節群になって指摘される。人間の根本条件が虚無である限り、世界の物もまた虚無である。虚無は人間の間中在在性に基づく主体的パトスの受け止め方であり、この見地から見ると世界のすべての物が虚無として立ち現れる。人間の根本条件が虚無だからこそ、それを条件とする世界の物もまた虚無として人間の条件となる。

ところが、『人生論ノート』の「希望について」の章には「虚無」とは別に「無からの創造」

という表現も出てくる。この「無」と先の「虚無」とはどういう関係にあるのだろうか。三木哲学の解釈においてしばしば議論的になるのがこの関係である。

2 「パトスの無」の諸段階

まず、そもそもなぜ「虚無」か。これは第四節群に書かれているように現代人の感覚と深く関係している。それでは「現代」とは何か。近代という人類史の時代は私見では三つの段階に区分される。すなわち、19世紀型の「西洋的（伝統的）近代」、20世紀型の「現代的近代」、そして21世紀型の「今日的近代」である⁽⁴⁾。この見地に立てば現代とは「現代的近代」のことである。

三木という思想家は大正期から昭和前期を生き抜いたが、この時期は「西洋的近代」から「現代的近代」への転換点に当たる。この転換は戦争体験によって劇的に促進され、そこから不安や、さらには存在の虚無という意識が生じ、これが特に当時の若い世代に共有された。ヨーロッパ人にとっての第一次世界大戦は日本人にとっての満州事変である。この時期、日本でも遅れて不安、無性格、無定形、抽象性という現在の意識、つまり虚無の意識が生じた（「不安の思想とその超克」1933年、全集10）。なお、三木の『パスカル論』では「虚無」と「無」は区別されていないが全集1：105）。その理由は現代人三木の不安が近代人パスカルの不安に重ねられているからであろう。

人間存在を「虚無」と感じるのは現代人の特殊な見方である（「自殺の哲学」1933年：全集13）。それに対して東洋には伝統的に「無」の見方が主流としてあった。この「無」には不安はなく、文化と自然、あるいは自然と人間が融け合っている。例えば『徒然草』や『方丈記』における「無常」の背後には救済があり、自然への溶け込みがある。虚無にはそれがない。三木は「東洋的自然主義」や西田哲学に関しては「無」あるいは「自然」という用語を用いている（「日本の性格とファシズム」1936年：全集13、「ヒューマニズムの現代的意義」1936年：全集17、「新日本の思想原理」1939年：全集17）。

それでは、「現代的虚無」と「東洋的無」はどのように関係するのか。三木の思考に視線を向けてみよう。彼の思考はパトスとロゴスの対立枠組みの中を動く。ロゴスの方を探ると客観的な世界あるいは公共的な世界に到り、逆にパトスの内部を探ると意識の対象が消えて「無」に突き当たる。この「無」がパトスの主体的な捉え方に固有の「パトスの無」である（「自殺の哲学」1933年：全集13）。「パトスの無」を主体方向に性格的に深めていくと、一方では「現代的虚無」が生じ、他方では「東洋的無」が生じる。そこからさらに虚無主義・ニヒリズムや東洋的自然主義が派生する。つまり、「パトスの無」が基本にあり、その特殊な受け止め方の方向に現代的な「虚無」と東洋的な「無」が生じて同列に並ぶことになる。だが、ここで終わりではない。「パトスの無」にはさらにその先がある。

『歴史哲学』では「事実としての歴史」が「無」の体験とされ、「創造」の体験に重ねられて

いる（全集6：91）。「創造力」や「愛」や「希望」を語る文脈では三木は「虚無」ではなく「無」を用いる傾向にある。「無」に関するまとまった説明は『哲学的人間学』にある（全集 18：291-293）。まず、客体から主体へと自己否定を行うと無の意識が生じる。これが「パトスの無」である。そこから進むと最初の段階で主体方向の極限としての無に出くわす。これが現代人の「虚無」である（この同列には東洋的「無」もある）。さらに深めていくと「本来の無」に達する。これがいわば「創造的無」である。極限としての虚無は相対的であり、本来の「創造的無」に到る通路とされる。『哲学的人間学』を執筆した時期、この「創造的無」は西田哲学の弁証法的世界とみなされた。

要するに、パトス方向の掘り下げの出発点は「パトスの無」である。そこから進んでいくと一方の「現代的虚無」と他方の「東洋的無」に到る。これらの特殊形が「虚無主義」と「心境主義」である（後者については例えば「日本的知性について」1937 年：全集 13）。さらに進むと最終的には「創造的無」に到達する。これを具現するのが当時の三木の考えでは西田哲学であった。

3 形の思考と制作の論理

以上を踏まえると「虚無からの形成」テーゼの曖昧な意味が判然としてくる。「パトスの無」の特殊現代的な「虚無」意識の上で、「虚無」として立ち現れる世界の不定のものをかき集めることである。ただし、そこにはなお論理が欠けている。それに答えるのが第三節群である。

その論理とは人間的生命と環境とのあいだの制作を通じた「適応」である。虚無を前提にして人間は環境の中の物との働き合いを通じて形を形成する。物を作る中で形を与え、それを通じて自己の形ができる。しかし、そのような「適応」は必ずしも「虚無」を前提にしなくても可能であろう。虚無と感じられようが、感じられまいが、生命と環境のあいだは適応という事態が成り立つからだ。もちろん素材だけの合成では形はできない。そこには内側から働く何らかの力が必要である。それを把握する思考は次の第四節群で取り上げられる。

新しい思考とは古代の実体と近代の関係・機能を総合する形の思考である。しかし、実体と関係・機能の総合というだけでは形成力についてまだ何も言っていないに等しい。ここで同じ頃にかかれた『構想力の論理』を参照すると、作られた制度の概念として「構造」に言及されている（全集 8：139、159-160）。形の形成にはその内部で作動する構造が不可欠である。構造の形成を中核として形の形成を捉えるのはシステム論であるが、これが登場するのは 20 世紀後半以降のことである⁽²⁾。残念ながら、三木が知っていたのはシステム論以前の有機体説であり、全体と部分の論理にすぎない。そのため有機体説を否定したとき三木が向かうのは「超越的な考え方」しかない。

形の思考の基礎にあるパトス方向の「超越的な考え方」とは何か。第五節ではそれが「一種芸術的」で「形成的」な世界観であるとされる。つまり、西田哲学である。この芸術的で形成的な

世界観が超越的な主体的形成力として働き、東洋的な無の哲学と現代人の絶対的虚無主義に欠けていた価値体系をもたらすのだ（「秩序について」）。ここで「価値体系」と言われるのは具体的には「協同主義」イデオロギーを指しているのだろう。

最終第六節では形の思考の論理が「不定なもの」をかき集める「混合の弁証法」であるとされる。ここで「不定なもの」は現代世界のあらゆる無限定でアモルフ（無定形）なものを指している。そこから現代人も無名にして無定形で無性格とされるのだが、私見ではこのような特徴づけは現代的近代の一面に過ぎない。この一面の偏りの延長線上に待っているのは「近代の超克」論である。弁証法は三木の好む思考だが、対立のない混合にもそれが当てはまるかは大いに疑問である⁽³⁾。

4 西田哲学をいかに超えるか

『人生論ノート』の各章を連載していた当時（1938-1941年）、三木は西田哲学を拠り所にする事で「一応の安定」に達していた（『構想力の論理』序文、1939年：全集8）。その安定した見地が制作による形の形成の論理であり、これによって自然と文化、あるいはゲマインシャフトとゲゼルシャフトが同じ土台の上で対比され、総合されることになった。

制作による形成の論理は『哲学入門』（1940年）の中に洗練されて示されている。そこには「行為的直観」をはじめとして「絶対的な場所」や「創造的世界の創造的要素」といった西田哲学の用語が頻出し、西田本人以上に西田哲学がスマートにまとめられている。社会から作られた個人が社会を作るという循環的な形成の論理が両者共通の土台である。その上で三木と西田との違いは、「開いた世界」と「閉じた民族」という場所の広狭を対立的に捉えるか否かという点に求められる⁽⁴⁾。開いた世界へのこだわりが大正期以来の三木の宿願であった人格の独立性を支えている。

『人生論ノート』の中心軸は制作の論理であり、この基礎には三木が捉えた限りの西田哲学がある。ところが、後年の三木がその立ち位置に満足しなかったことは「最後の手紙」（1945年）に示唆されている。そこには西田哲学は東洋的現実主義（その根拠は自然主義）の完成であり、長所とともに重大な欠点があるから、これを克服することなしに将来の新しい日本の哲学は生まれないと書かれている（全集19：453）。

三木は従来から西田哲学の「観想的性格」を指摘し（例えば「西田哲学の性格について」1936年：全集10）、これを克服するために民族と対立する「世界」の視点を西田哲学に組み込んできた。

『哲学入門』でそれが果たされた以上、その後にも同じ欠点の指摘を繰り返しているとは考えにくい。とすれば、「最後の手紙」に見える「欠点」とは何を指しているのか。そしてその克服の方向はどこに向かったのか。これが三木哲学研究における最大の謎であり、三木から私たちに託された課題である。

政治的挫折という理由は契機となったとしても表面的であろう。「新しい日本の哲学」と書かれている以上、答えは思想の深部の変容でなければならない。三木が主唱した「協同主義」はロゴスだらけのイデオロギーであった。そこには三木がこだわってきたパトスが感じられない。人間の新しいタイプも抽象的である。三木の思考がつねにパトスの根底に主体的に向かい、しかも西田哲学に止まれないとすれば、それはどこにたどり着くのだろうか。

5 「死」を抱え込んだ宗教的創造力

その答えは「死」を正面から受け止めた宗教的な「創造力」に求められる。「死者のリアリティ」で説明したように、死は人間存在にとって「根源的に自然的なもの」であり、この死を正面から問題にするのが宗教である。宗教は「死」を受け止め、そこから反転して文化を創出し、刷新する。形の思考の根底で働くのは芸術的な形成力を超えた先にある宗教的な創造力である。

『人生論ノート』には「虚無からの形成」を生み出す「創造的無」をめぐる二つの観点が混在している。前面に出ているのは「人間の条件について」に見られる制作の論理と混合の弁証法と協同主義の観点である。他方、その背後には「死について」で打ち出された死者の生命と宗教的創造力と絶対的な伝統主義の観点が隠れている。

どちらも「創造的無」の捉え方であるが、前者は創造的世界の創造的要素という一般的水準にとどまり、そこからは具体的な人間のタイプが出てこない。あるいは「世界」性に依拠する「人格」についても同様である。それに対して後者からは具体的な死者がリアリティを持って立ち現れる。人間のタイプとして親鸞が登場し、兄弟主義として伝統が示される。その意味で後者の方が「パトスの無」を主体的に突き詰めた「創造的無」の捉え方としては徹底している。

結局、政治的逆風の中で、西田哲学を越えるために三木の思考は「パトスの無」の主体的な徹底化の方向に向かった。その過程で「虚無からの形成」を生み出す制作の論理の背後に隠れていた「死者の生命」の観点があらためて甦った。それが「親鸞論」となった。そして三木はその延長線上に、「死者の生命」を根拠にして新しい人間のタイプの思想伝統を展開しようとした。これが私の解釈である。そうだとすれば、三木哲学の将来構想を今日の私たちはどのように引き継ぐべきであろうか。私の考えは「死のリアリティ」の末尾に示している。

注

* 三木からの引用は岩波版『三木清全集』から「巻数：頁数」で示す。

- (1) 三つの近代の区別については拙著「西田・三木・戸坂の思想とくもの思考」、津田雅夫編『昭和思想<新論>』（文理閣、2009年）第二章を見られたい。
- (2) 西田にはシステム論の萌芽が見られるが、これまでの西田哲学研究ではその独特の用語のせいでシステム論との接続の道筋が見えなかった。

- (3) 津田雅夫『人為と自然』（文理閣、2007 年）は三木哲学の研究水準を高めた名著である。その中で津田は「パトスの無」の究極にある「根源的に自然的なもの」に注目する中で、「不定なもの」から「もの」そのものへと考察を問い深めている。これは一つの見識ではある。しかし、津田は「根源的に自然的なもの」の箇所を引用した際、なぜか「死」を落としている。第一部「死者のリアリティ」で指摘したように、三木自身は「ロゴス＝文化」の対極にある「パトス＝自然」の根底にある「死」を直視し、「死」を正面から受け止めた宗教の創造力を文化形成の根源と考えている。
- (4) 『哲学入門』をコミュニケーションシステム論の見地から考察したのが、拙著「三木は西田哲学を越えることができたか」、田中久文・藤田正勝・室井美千博編『再考 三木清 現代への問いとして』（昭和堂、第 6 章、2019 年）である。